



世界のVIPが認めたモノに本来の機能を与えるデザイン

楽ができる職業は何かと考えた

私はインダストリアルデザイナーやプロダクトデザインを中心とするデザインディレクターであり、大阪大学大学院工学研究科教授として若い人を教育することにも力を注いでいます。しかし、少年時代には小説家になりたいと考えていました。小学生の時には角川の文学全集や平凡社の世界文学全集をすべて読破し、檀一雄の『火宅の人』に描かれた小説家の自由な生き方に憧れを抱いたということもありましたが、原稿用紙に字を書けばよい作家は、世の中で最も楽ができる職業だと思えたのです。

自分の頭は理系だったこともあり、森鷗外や北村夫に倣って医学部を出てから作家になろうと思つたものの、受験に失敗。浪人中に横尾忠則さんの作品に衝撃を受け、紙に線を書いて色を塗る仕事は小説家よりも楽そうだといい、今度はイラストレーター志望に転向。金沢美術工芸大学美術工芸学部に入りました。30年続いた宮大工の末裔である福井県の母方の実家には相当数の漆器や焼物があり、さ

伝統工芸から眼鏡、人工心臓まで、美しさだけではなく、機能性も含めたデザインを追求する川崎和男氏。そのこだわりが海外でも認められ、世界の主要な美術館に多数の作品が収蔵される川崎氏の世界観を探る。

さまざまなモノづくりの職人さんにも祖父はかかえていたので、そういう環境が影響したのかもしれない。もともと絵は得意で、小・中学生時代の写生大会では必ず大賞や全国で最優秀賞を受けたりしていました。模型づくりなども大好きでした。最近では工学部の学生でありながらラジオをつくったこともないというような学生が多く、若い人にモノづくりの経験が乏しくなっていることを憂えます。

大学卒業後は株式会社東芝の意匠部（現デザインセンター）に採用され、音響機器のデザインに携わることになりましたが、私は社内でも変わり者と呼ばれていてに違いありません。入社前から「第一志望オーディオ」、「第二志望オーディオ」と配属の希望を出し、音響以外の仕事には就きたくないことを主張していました。入社式では紫のシャツに黄色のブレザー、パンタロンとい

う出で立ちで最前列に座り、当時の社長だった土光敏夫さんが「あれはいったい何者だ?」とあつて気にされていたそうです。

20代の終わりに、私は将来の幹部候補として海外企業留学生に選ばれたのですが、留学が予定されていた年に交通事故に遭い、車椅子で生活することを余儀なくされました。その翌年、退職して赤坂に川崎和男デザイン室を設立。デザインディレクターとしての本格的な第一歩を踏み出すことになったのです。

世界に認めさせる唯一の手段は実力

独立後、さまざまな分野のデザインを手がけた私は、40歳のときに毎日デザイン賞を獲得しました。現在は同賞の選定委員として賞を与える立場にいますが、日本ではこの賞をとって初めて一人前のデザイナーとして認められるというところがあるの

PROFILE 川崎和男

大阪大学大学院工学研究科教授、デザインディレクター、博士(工学)。
【かわさき・かずお】1949年福井県福井市生まれ。デザイナーディレクターとして伝統工芸品から家電やコンピュータ、ロボット、原子力エネルギー、人工心臓、先端医療、海軍艦艇、宇宙空間の進化などを幅広くデザイン活動を行う。具体的には「全量換気人工心臓の開発」、「ロケット・クサ本線」デザイナー、「原子力小型機開発」のデザイン支援、「医工連携」におけるデザインによる実証支援（など）として、研究開発、手法開発、その教育と業務に携わっている。グッドデザイン賞審査委員など行政機関での委員を歴任。国内外の主要美術館に永久収蔵、永久展示多数。【Masao】日本版の「世界が尊敬する日本人100人」に選ばれる。現在、デザインによる世界平和構築をめざして「Peace-keeping Design (PKD)」プロジェクトを推進。

2008年のアメリカ大統領選挙で、副大統領候補のサラ・ペイリンが着用していた眼鏡



で、私にとっては意義ある受賞でした。

その後、大手海外メーカーの仕事をする機会を得ました。しかし、自信を持つてプレゼンテーションをしても、なぜか「このことく不採用になってしまう。のちに、プロジェクトに関わるWASP（ホワイト・アングロサクソン・プロテスタント）たちが、デザインの善し悪しとは無関係に私の企画を潰していることが判明しました。「日本人には仕事をさせたくないんだな」ということを痛感した私は、ますますグローバル化が進む国際社会で、日本人が問題なく仕事を進めていくにはどうすればよいかを、真剣に考えるようになりました。

デザイナーとして独立してからの私は、出身地である北陸のモノづくり力を発信したいという思いがありました。そこで、福井県福井市に本社を置く増永眼鏡の依頼を受け、眼鏡フレームのデザインも手がけました。ノーズパットなどに特殊な技術を実施することで重みを軽減した眼鏡は1995年に国際的な賞を受賞。その後、開発したレンズに応力のかからない設計で

● 一粒万倍【いちりゅうまんばい】わずかなものが非常に大きく成長するたとえ

「レンズの歪みから生じる目への医学的負担をなくす眼鏡」は、2000年に世界有数の眼鏡のデザイン展である、パリのシルモグランプリでグランプリを受賞。KAWASAKIの眼鏡フレームは、やがて世界で広く知られるようになり、08年のアメリカ大統領選挙で副大統領候補のサラ・ペイリン（現アラスカ州知事）がかけたことで話題になり、現米国務長官のヒラリー・クリントンや元国務長官のコーリン・パウエルにも愛用されました。

このようなことから、日本人が世界で認められるには、相手が否応なく認めざるを得ない仕事をやる以外にはないのだ、と私は考えるようになりました。

デザインは人に希望を
与えるものであるべき

45歳のときに心臓発作に見舞われた私は、医師からいずれ心臓移植が必要になるかもしれないといわれたことをきっかけに、全置換型の人工心臓をデザインするようになりました。人の心臓をもらったり、性能に不安のある既存の補助人工心臓を用いたりするより、自ら設計した信

低下です。経済がいかに凋落しようとも、「我々には高度な技術力があるのだからいつか巻き返せるはず」と楽観視する人が少なくないようです。しかし、私はこの国のこれから大変な危機感を抱いています。努力や工夫をすることなく、儲からないという理由で容易に事業を切り捨てる経営者があまりにも多いのです。2代目、3代目の経営者のなかには苦勞も知らなければ、成功体験がない人もいます。そのような社会状況が日本の産業界全体の技術力の低下を招き、例えば東日本大震災直後に原発の被災状況を調べるべく内部へ入っていくのが、国産ロボットではないというような事態を招いたのではないのでしょうか。

関西には「好きでつか」「ほんまでつか」「儲かりまつか」「よろしおましたな」という馴染みの台詞がありました。最近「よろしおましたな」という言葉が聞かれなくなり、そんなところにも

頼めるものを使いたいと思っただけです。デザインにあたってはまず、最新の位相幾何学などを応用しつつ、光造形システム3D CADで入力したデータをもとに、液状の光硬化性樹脂に紫外線レーザーを照射して立体モデルを造形するシステムでクライムの壺（ドイツの数学者・クライムによって考案された境界も表裏の区別も持たない2次元曲面の一種で、位相幾何学で扱われる）をつくり、それを応用して人工心臓を設計したのです。

当時、名古屋市立大学大学院の教授になった私は、学者なら論文にまとめると勧められ、「光造形システムによる全置換型人工心臓の基本的形態化デザイン」という論文で医学博士号を取得しました。

デザイナーが医療機器の設計にかかわるのは、実はとても重要なことです。なぜならデザインとは、既存のものが本当に合理的かどうかを検証する作業でもあるからです。先にお話ししたサラ・ペイリンらに愛用された眼鏡フレームは、医学博士号を得てから実際に人体解剖を行い、耳の横の神経・血管・リンパ系や、眼球周辺の構造を徹底的に調べて、医学的にも理的に合った設計を施しました。

デザイナーはともすると「がち」だけが問題にされ、大量消費社会では「欲望の刺激装置」としての役割を果たしてききました。しかし、その本質は単なるデコレーションではなく、機性能が突き詰められなければならないはずで、その意味でデザインとは、人に希望を与えるものでなければならぬというものが私の持論です。

医学博士の知識をデザインに反映させた高精度家庭用血圧計。見やすい結果表示と持ち運びやすさを考慮している。



それと同時に、私は案がでる商売として小説家やイラストレーターになることを考えた時期があると述べましたが、デザインは人間の「楽」につながるものでもなければならぬ。そのような観点を持つと、デザインの仕事はあらゆる学問領域を自由に超えることが可能です。身の回りの日用品からロボット、コンピュータ、原子力発電装置まで手がけてきた私ですが、最近、貧困地域や紛争地域で安全かつ確実にワクチンを接種できる注射針のデザインなどによって平和を実現するためのPKD (Peace-Keeping Design) も提唱するようになりました。

技術の衰退と流出に
歯止めをかけるために

私がいまひしひしと感じているのは、日本の技術力の急速な価値観の大きな転換が感じられます。「正しい商売をしましたね」という含みがある「よろしおましたな」が消えたということは、経営者が「損得」しか判断しなくなったことを物語っているように思われてなりません。大手家電メーカーや自動車メーカーに就職した私の教え子も、優秀だった学生ほど海外勤務を命じられる傾向にあります。そんなところにも日本の頭脳や技術が流出していることを実感させられます。

大学院の私の研究室の入口には、「オンリーワンなどありません、この研究棟にて研究と研鑽を積み重ねし者はナンバーワンとして社会変革のリーダーたれ」というメッセージを掲げています。「オンリーワン」など、「ナンバーワン」になれない者の言い訳にすぎません。この国の未来のためにも、デザインや技術に携わる人間は、そのくらの気概を持つべきなのではないかと私は考えています。

大切なのは、オンリーワンではなくナンバーワンを目指す姿勢



モントリオール科学センターにてDREAM EXHIBITION 10点のうちの一つに選ばれた人工心臓。写真上は、人工心臓D15（全上）、人工心臓D16（全中）と進化を遂げている。キートンや、有田焼の伝統工芸とのコラボレーションによるコーヒーカップセットなど、あらゆる分野でデザインの本質を追い求めている。

